

# 身近な地域における地域福祉の推進

## ～地域福祉推進拠点としての社会福祉施設の取り組み～

厳しい経済状況・急速な少子高齢化の進行・障害のある方の地域生活移行・制度の狭間にあるニーズ等を考えると、従来の福祉サービスで対応するには限界のある課題が増えてきており、地域住民の互助・共助の役割が増加していくと予想されます。そこで、本県の社会福祉施設の取り組みから、身近な地域における地域福祉を進める拠点機能について探ります。

### 互助・共助を働きかける 専門職員の配置を

昨年末、本県で高齢の母親と重度障害のある子の孤立死事件が発生しました。福祉課題のある個人・世帯の孤立は深刻な問題であり、個別の生活課題にどう気づき、互助・共助の関係をどう広めていくか、私たち福祉関係者が受け止めるべき課題でもあります。

本会が昨年度に行った課題把握調査では、隣保館や地域福祉センター等の地域生活施設関係者から「住民参加による地域福祉活動を促進するため、社会福祉施設や地域包括支援センター等が『推進拠点』となり、地域住民に働きかけていく役割がある」との指摘がありました。住民の自発性を待つばかりではなく、社協・社会福祉施設・地域包括支援センター等に、互助・共助の仕組みづくりを働きかける専門職員を配置する必要性があると提言しています。

では、地域福祉の推進拠点には、どのような取り組みが期待されるのでしょうか。

### 地域に開かれた福祉拠点として 「中心子どもの家（相模原市）」

（福）中心会の運営する児童養護施設「中心子どもの家」では、虐待等により、社会的養護を必要とする子ども

もの育ちを支えています

海老名市から移転した平成12年より、地域に根差した施設運営を目指し、子育て講座を開催したり、コミュニティホールの貸し出し等を行っていました。講座参加者が300名を超えたころ、地域に向けた取り組みをもう一歩進められないかと考え、平成18年に立ち上げたのが「親子サロンおもちゃばこ」です。

もともと地域には、子育て世代の母親が集まるグループもありましたが、「食事を持ち込める場所がない」との声を聞き、お昼ご飯を食べながら時間を気にせず過ごせる場として、コミュニティホールを提供しました。夏には屋上プールを開放したことも評判となり、今では、親子が

園庭の砂場やブランコを使って自由に遊んだり、サロンを利用して子どもが小学校に入学してからも施設



人形劇やリズム遊びなど、親子サロン「おもちゃばこ」にはワクワクする遊びがたくさん！

設に遊びに来る様子が、日常的にみられるようになっていきます。

「日ごろから施設を開放し、声を掛け合う関係ができたことで、社会的養護を必要とする子どもたちへの温かい視線が、地域の中で育まれている」と施設長の曾我幸央さん。「職員は地域の子どもたちの名前も覚えていて、『また来てね』と声を掛けている。この小さな一言の積み重ね、地道な働きかけがあつて、施設は地域に開かれている。おしゃべりの中で、ふとした瞬間に心配ごとを話せるような、地域の相談相手になっていきたい」と語ります。

### 地域の中で利用者を支えるために 「民衆館（横浜市）」

（福）横浜愛隣会の運営する「民衆館」は、生活保護法上の更生施設で、低所得者の社会復帰・自立に向けた支援に力を注いでいます。

施設利用者の生活困窮の背景には、精神障害やアルコール依存症等があり、全体の60%以上の方が医療機関等との連携を必要としています。入所期間は平均2年7カ月。まずは体調を整え、日常生活のリズムを取り戻し、周囲とのコミュニケーションを図るためのカウンセリング等を積み重ねながら、自立を目指します。

また単身生活に移行しても、周囲